

美をつくし

大阪市立美術館だより

平成27年8月1日発行



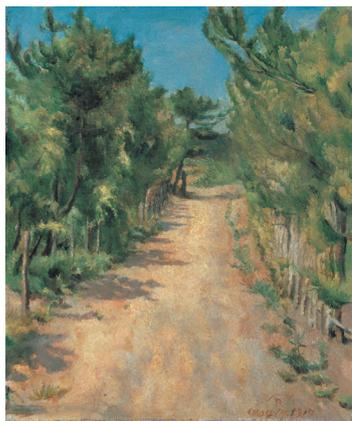
木造 大將軍神坐像

平安時代・12世紀 本館蔵(田万コレクション)

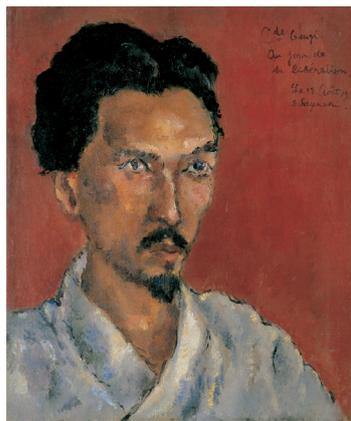
大將軍神とは、陰陽道において方位の吉凶をつかさどる八將神のひとつ。四天王像や十二神將像のように甲冑を身にまとうが、どこかユルさのある穏やかな造像である。

伝説の洋画家たち 二科100年展

2015年9月12日(土)～11月1日(日)



岸田劉生《初夏の小路》
1917年 第4回二科展 下関市立美術館



林 倭衛《出獄の日のO氏》
1919年 第6回二科展 長野県信濃美術館

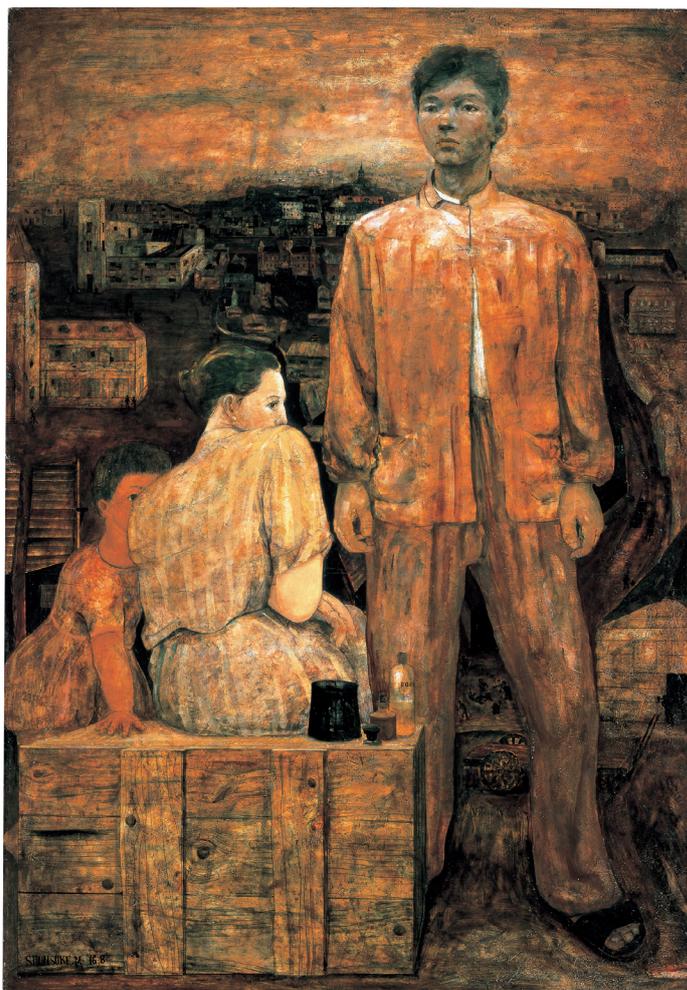
「在野の公募展」といういささか使い古された定冠詞で紹介されることの多い二科展が、この秋に第100回を迎えます。国営の官展が存在しない現在にあって、それでも在野の公募展の雄として二科展が存続し続ける理由とは一体何なのでしょう。120点を超す歴史的名画が一堂に会する今回の特別展「伝説の洋画家たち 二科100年展」は、その謎を解き明かすひとつの鍵となるかもしれません。

林倭衛《出獄の日のO氏》は、かの無政府主義者・大杉栄をモデルとした作品です。釈放されたその日に大杉を訪ねて一気に描き上げたといわれる本作は、二科展へ出品され、見事入選しますが、それからが大変でした。釈放されたばかりの「政治思想犯」を描くとは何事か。秩序紊乱の恐れがあるため展示はまかりならぬ、という当局のお達しです。

しかし、そこは「在野の雄」二科会のこと。警察当局から裸体画への言いがかりをあしらってきた経験もあり、この作品も展示することに一旦は決めるのですが、マスコミに取り上げられてちょっとしたスキャンダルとなってしまったこともあり、結局は混乱を恐れ作者林自身が展示を取り下げるというかたちで決着を見ました。「大正デモクラシー」真っ只中、芸術と権力のはざままで起きた事件ですが、実は21世紀となった今日であっても表現の自由が侵される危険性が常に潜んでいることを本作は気づかせてくれるかもしれません。さて、そうした背景を抜きにすると、皆さんの眼に本作品はどのように映るでしょうか。やはり、言い知れぬ迫力を感じるでしょうか。それとも…。

あるいは、100号の大作、松本竣介《画家の像》の前でみなさんは何を思うでしょうか。何かに立ち向かうようにして立つのが画家自身であることを知らずとも、何かしら決意めいた重いものを感じるでしょうか、それとも人物と背景のスケール感の違いにたじろぎ、違和感を覚えるでしょうか。

最後に二科賞受賞作、岸田劉生《初夏の小路》をご覧ください。作者の鶴沼での療養生活についての知識がなくとも本作から潮の香りを運ぶさわやかな湘南の風を感じる事ができるでしょうか。



松本竣介《画家の像》
1941年 第28回二科展 宮城県美術館

絵画の見方は自由であってしかるべきですが、名画が名画と呼ばれる理由、二科展がこれまで存続した理由は今回展示する作品を前にすればおのずと明らかになる、とひそやかな確信があります。「伝説の洋画家たち 二科100年展」は日本の洋画が歩んできた一つの歴史を振り返る絶好の機会です。100年分の芸術の秋を一挙にご堪能ください。

(児島大輔)

◆関連イベント

【記念講演会】

- ①9月19日(土)13:30～15:00「二科100年」
当館館長 篠 雅廣
- ②9月27日(日)13:30～15:00「二科会彫刻部」
二科会常務理事 吉野 毅 氏×二科会理事 小田信夫 氏
- ③10月11日(日)13:30～15:00「二科会絵画部」
二科会理事長 田中 良 氏×二科会常務理事 伊庭新太郎 氏
- ④10月17日(土)13:30～15:00「二科・大阪・植重」
当館館長 篠 雅廣

【見所トーク】

- ①当館学芸員による見所解説
①9月13日(日) ②10月3日(土) ③10月10日(土) ④10月24日(土)
各日13:30～14:00
- ②二科会関西支部長の尾崎功氏はじめ絵画部会員による見所解説
10月27日(火)～11月1日(日) 連日13:30～14:00

井田吉六作「色絵菊花流水図手焙」について

本年は尾形光琳の没後300年として、琳派関連の展覧会が各地で開催されている。光琳の弟である尾形乾山(1663~1743)も、陶磁器や絵画の制作によって琳派の作家として注目されてきた一人である。

乾山は、37歳の時に京都の鳴滝泉谷に窯を開き、鳴滝が京都の北西(乾)の方角にあることから「乾山」と号し、作品の銘としても用いた。その後、50歳の時に京都市内の二条丁字屋町に移住して作陶を続け、69歳の享保16年(1731)の頃に江戸に下向して入谷に移り住んだ。元文2年(1737)9月から初冬には、陶磁器制作の指導のために下野国佐野にいき、その後江戸に戻って81歳で死去したとされる。京都以外での乾山の作陶については、栃木県佐野市の旧家から発見されたとされる乾山銘作品の真贋論争事件(昭和37年)の経緯もあって、未だ十分に研究が進展していない状況にある。

一方アメリカのボストン美術館のモースコレクションには、井田吉六(1792~1861)作による乾山写しの「水指」が所蔵されていて、この作品の銘文が下野佐野期の乾山作品を検討するのに良好な資料であることが古くから知られていた。井田吉六は、江戸に出てから骨董商に転じてほぼ独学で製陶も学び、文化8年(1825)浅草蔵前で、天保5年(1834)には浅草寺境内にやきものの店を開いて商売をしたとされる。のちに江戸の5代乾山みつぐんとされる西村藐庵のもとで乾山の陶法を学んで「乾斎」とも号し、11代將軍徳川家斉の面前で作陶をする席焼を命じられるほどの陶工となって、甥の三浦乾也(1821~89)の作陶指導もした人物である。

その作品の銘文は満岡忠成氏が『陶器講座 第4巻 東日本の陶器』雄山閣(1938)の「関東諸窯」で紹介しているが、篠崎源三氏は『佐野乾山』窯藝美術陶磁文化研究所(1945)の中で、モースコレクションの目録に掲載された銘文と三浦乾也による粉本集「石井乾也陶漆摹範」(梶山家蔵)にある「乾山手あぶり」の写真2枚を掲出して考察をしている(図1)。三浦乾也による粉本集「石井乾也陶漆摹範」については、中野敬二郎氏が「三浦乾也と泰野窯と梶山良助」『焼きもの趣味』昭和16年10月号で取り上げた内容を引いて紹介し、銘文中の「松邨壺青英亭」については、慶長期以前から続いた佐野の松村家の本家が本陣をつとめる地方屈指の素封家であることから、「壺青英亭」は当時の本家の茶室の庵号ではないかと類推している。篠崎氏は、吉六の銘文

の内容をふまえて吉六と乾也が伯父と甥、さらに師弟の関係でもあることから、尾形乾山が下野国佐野の松村家を訪れて作った本歌の手焙(モースは吉六作品を Water-jar とするが、篠崎氏は手焙の誤解と考えている。)をどこかで見て、乾也は折り本の写生帳にその姿をスケッチし、井田吉六は作品の写しを焼造したのであろうと推定している。

さて、本稿で紹介する井田吉六作「色絵菊花流水図手焙」は、篠崎氏が挿図で取り上げた作例と近似し、ボストン美術館のモースコレクションの作品とも同手のもので、大阪市立美術館がバルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏から昭和28年に寄贈を受けた作品である(図2)。ウンゲルン-シュテルンベルク氏は、神戸外国語大学の講師であったドイツ系エストニア人のロシア貴族であったが、その経歴等については、土井久美子「バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏について」『大阪市立美術館紀要』第15号(2015)に詳しく紹介されている。ウンゲルン-シュテルンベルク氏の寄贈による陶磁器類は、ボストン美術館のモースコレクションと同様に、江戸後期から明治期にかけて焼造された日本陶磁が中心で、来日した昭和3年(1928)から死去した昭和27年(1952)の間に日本各地で収集された作品群である。

本器は高18.5cm、口径13.6cm、底径14.0cm、碁笥底ではほぼ円筒形を呈する作品で、円盤状の薄い布団が付属し、手焙とすべきものとする。内面上端部から外側面中

程までは黒地に銕絵で菊花の縁取りをして、花葉には黄色、葉には緑の色釉をさしてあり、下方の白地の部分には染付でいわゆる光琳波が施文される。乾也による乾山作手焙のスケッチとは、菊花文の表現が簡略化されている点が注目される。底部には銕絵による銘があって、長方郭内に「於野之下州佐壱/庄松邨壺青英/亭而雍州/乾山陶隠深省圃」、その左下方に「吉六模之」と記しており、モースコレクションの目録に記載された書体・字配りなどの点でもほぼ一致する(図3)。釉葉の剥落が若干あるものの、幕末期の乾山写の作例中では、絵付けなどの技術の点からも上手の作品であり、吉六の作品としても良好な作例と考えられる。本歌の作品が発見されていない中では限界はあるものの、本器の銘文は下野佐野における尾形乾山の作陶を類推できうる可能性があり、江戸下向以降の乾山陶のあり方を探る傍証資料としても、貴重な作例と考える。

(守屋雅史)

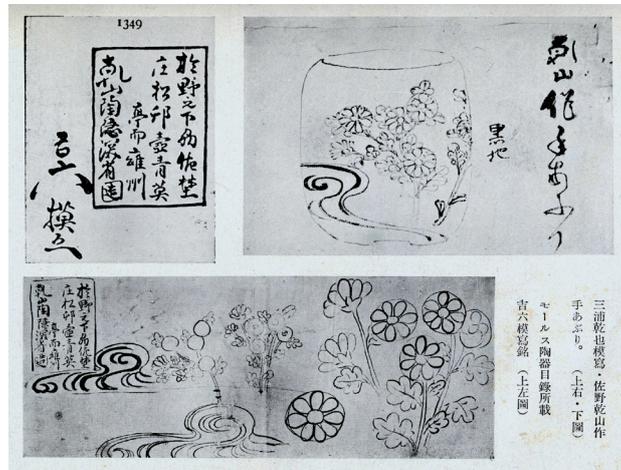


図1



図2



図3

ふたつのきょう かい龔開画

当館収蔵の中国書画コレクションにおいて、ひときわ異彩を放つ1点がこの龔開筆「駿骨図卷」(以下、大美本)である。ひどく痩せた馬の腹には15本の肋骨が浮き出しており、自跋によれば「千里の異」、すなわち一日に千里を走るという常ならざる駿馬の姿を表わしたという。作者の龔開(1221~1307?)は、字を聖予、号を翠巖といい、淮陰(江蘇省淮陰)の人。南宋の景定年間には両淮制置司監であったが、元になってからは入仕せず遺民として過ごした。その画は人となりとともに同時代より多くの人士に愛され、本作にも歴代の名士の跋が連ねられている。大美本については、かつて当館の紀要において当時学芸員であった中川憲一氏によって仔細な検証がなされている(1982年)。近日、機会があって本作について取り組んでいるが、なかなか難解、あらためて先学の労と熱意に頭の下がる思いである。

本作をみていく中で、先の紀要では不明とされていた数顆の印のうち、後肢蹄の傍にある「臥雪齋藏」(白文方印)と「笙巢真賞」(朱文方印)の二顆が、アメリカ・ワシントンD.C.にあるフリーア・ギャラリー所蔵の龔開筆「中山出遊図卷」(以下、フリーア本)にも捺されていることに気がついた。フリーア本もまた古くより人口に膾炙し、大美本とならんで現存する龔開の代表的な作例として知られている。フリーア・ギャラリーでは、公式サイト内において所蔵の宋元書画について全図と釈文、英訳を公開しており(2007年公開)、その成果を参照すると先の二顆は曾協均なる人物の収蔵印と推定されている。

曾協均は、字を舜臣、号を笙巢といい、江西南城の人。駢儷文の名家として知られる曾燠(1759~1831)の子である。生卒年ははっきりとしないが、清朝末の道光から同治年間に活躍した。李玉棻『甌鉢羅室書画過目考』の光緒二十(1894)年の自序をみると「景劍泉閣学其濬・曾笙巢侍御協均に就正し、両家の秘笈を探索するに、聆奇瞬美、晷旦疲れず、夜分枕に就くも、展転して精思す……」と回想している。生来書画に深い関心を寄せていたという李玉棻が、収蔵家・賞鑑家としても知られていた景其濬とならんであおぎ、秘蔵の逸品をみせてもらったというのだから、曾協均も相当の収蔵家であったようである。

大美本とフリーア本は、収蔵印や跋文をみるに作家の手を

はなれてからはそれぞれ別の来歴をたどっているが、清代になって大収蔵家・高士奇(1645~1704)のもとで一度巡り合っている。フリーア本に附された高士奇の康熙庚辰(1700)年の跋には、「丁丑(1697)の冬、余は養を請い初めて還り、呉門(蘇州)に於いて其の《羸馬図》を得たり。今年六月又た其の《中山出遊図》を得たり……」とあり、一方、大美本に附された康熙戊寅(1698)年の跋には「去年の冬、余の舟呉を過ぎるに、其の《羸馬図》を得たり。楊鐵厓・倪雲林の跋与に有りて、更に珍藏に足るなり……」とある。この二跋から、高士奇がフリーア本《中山出遊図》に先立って入手した《羸馬図》が、まさに大美本であったことがわかる(ちなみに大美本には、跋に謂うように楊維禎と倪瓚の跋が附されている)。

その後、二作はふたたび別々の途をたどることとなった。よく知られているように、大美本は清の内府に入って乾隆帝の賞翫するところとなり、一方フリーア本は市井で愛玩され幾人かの収蔵家の手を経た。清末から民国初期の混乱期における文物流出の中で、一方は日本へ、もう一方はアメリカへと渡ることとなったが、ちいさな二顆の証言を聞けば、その前夜に曾協均の秘笈裏でつかの間の再会を果たしていたかもしれない。

現在、二作は遠く離れたふたつの美術館に収蔵されているが、近年では2010年にニューヨークのメトロポリタン美術館で開催されたThe World of Khubilai Khan: Chinese Art in the Yuan Dynasty展において、海を越えて一堂に会している。また、龔開の代表作としてわたしたちの脳裏ですでに深く結びついている。700年以上ものときの中で、幾たびの流転を繰り返し今ここにある龔開画の前に、当館が本作の安住の地であり続けるよう意識をあらため、またそう願ってやまない。老大家を相手にするにはあまりにも心もとないが、今しばらく大美本に向かい真摯に耳を傾けたいと思う。

(森橋なつみ)



曾協均収蔵印
上:「笙巢真賞」、下:「臥雪齋藏」



龔開 駿骨図 元時代・13-14世紀 本館蔵(阿部コレクション)

俑の世界

2015年
7月14日(火)―7月26日(日) /
8月4日(火)―8月30日(日)

俑とは墓に副葬するために陶器などで作られた「ひとがた」のことですが、近年の中国では動物や建物などの副葬品も俑と呼んでいます。今回は前漢～唐時代の人物・動物・建造物の俑を中心に展覧します。時代ごとに大きく異なる俑の造形をお楽しみ下さい。



三彩 駱駝 唐時代・8世紀 本館蔵

輸出漆器 桃山～明治

2015年7月14日(火)―7月26日(日) / 8月4日(火)―8月30日(日)



花鳥蒔絵螺鈿聖龕 桃山時代・16世紀 個人蔵

日本の輸出漆器を展示します。16世紀の中頃、ポルトガル人宣教師がカトリックの布教のために渡来し、日本からヨーロッパへの漆器の輸出が始まります。キリスト教の祭具、箆笥や櫃などの調度が蒔絵や螺鈿を用いて制作されました。日本の漆器はヨーロッパの王侯貴族の間で好まれ、その輸出はキリスト教の禁教、鎖国の後もオランダや中国を経由して続けられました。

ヨーロッパの王侯貴族の間で好まれ、その輸出はキリスト教の禁教、鎖国の後もオランダや中国を経由して続けられました。

螺鈿 中国・朝鮮半島・日本

2015年7月14日(火)―7月26日(日) / 8月4日(火)―8月30日(日)

鮑や夜光貝を用いた漆器の装飾は中国・朝鮮半島・日本・タイなど東アジアの諸国で盛んに行われていますが、地域や時代によって多彩に発展してきました。ここでは当館の収蔵品とご寄託品のなかから、各地の螺鈿漆器の優品をとりあげてご紹介したいと思います。



螺鈿 楼閣人物図食籠 明時代・17世紀 本館蔵(カザールコレクション)

堆朱・鎌倉彫・根来

2015年7月14日(火)―7月26日(日) / 8月4日(火)―8月30日(日)

朱漆を塗り重ね図を彫り表した「堆朱」、文様を彫り漆を塗った「鎌倉彫」、黒漆を下塗り、朱漆を上塗りした「根来」。ここでは当館ご寄託品から三つの技法の作品を選んで展示いたします。



重要文化財 鎌倉彫(彫木漆塗)牡丹文大倉合 室町時代・15世紀 南禅寺蔵

仏教工芸

2015年8月8日(土)―8月30日(日)

仏教で礼拝の対象となる舎利・仏像・経典などを荘厳・供養するための器物は、制作当時の最良の素材と最高の技術、そして最新の意匠が用いられました。このような工芸史を彩る名品のうち、今回は金工品に焦点を当てて展示いたします。夏の一日、仏教工芸の清涼な世界をご堪能ください。

金銅三鈷鈴 鎌倉時代・13世紀 本館蔵(田万コレクション)



沈没船からの贈り物

2015年8月8日(土)―8月30日(日)

ベトナム～東南アジア周辺の海に沈んだ船から引き揚げられた陶磁器を展覧します。ベトナムのホイアン沈没船のベトナム陶磁をはじめ、コンダオ沈没船、ダイアナ号、カーマウ沈没船の中国清代の青花などを陳列します。涼やかな青花の藍色をご堪能下さい。



青花有蓋瓶ほか コンダオ沈没船引揚品 清時代・17世紀 個人蔵

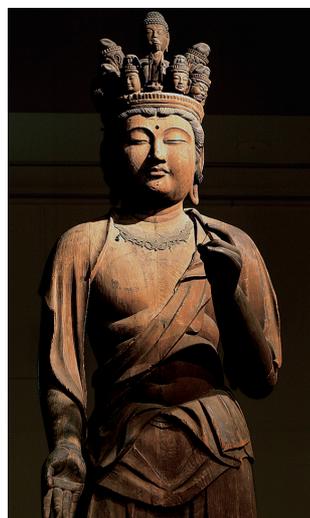
仏教彫刻

2015年8月8日(土)―8月30日(日) / 9月12日(土)―11月1日(日)

中国南北朝時代の北魏、西魏(5～6世紀)、および平安、鎌倉、室町時代(9-16世紀)の仏像・神像を一堂に展示します。制作された地域や時代により大きくかわる、「かみほとけのすがた」の移り変わりをぜひ体感してください。



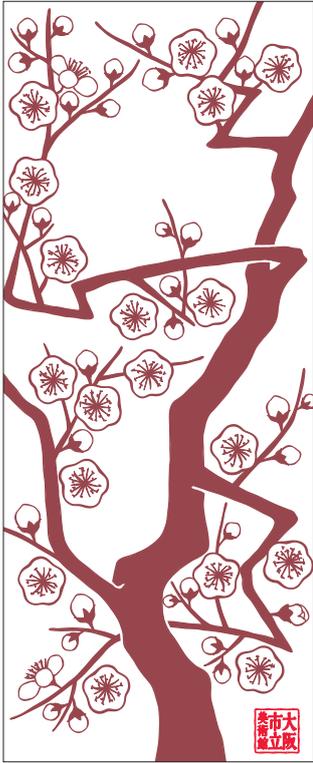
石造 如来三尊像 中国南北朝時代西魏・大統8年(542) 本館蔵(山口コレクション)



木造 十一面観音菩薩立像 鎌倉時代・13世紀 大阪・四天王寺蔵

オリジナルグッズの紹介

可愛らしくもシックな梅柄の「てぬぐい」、ユニークな妖怪たちの「チケットフォルダ」、擬人化された動物の個性が活きる「十二支絵葉書」など、オリジナルグッズ多種が仲間入りしました。ご来館の際はぜひミュージアムショップへお立ち寄りください。



①

- ①てぬぐい
尾形光琳「梅時絵箱図案」
- ②チケットフォルダ
原在中「百鬼夜行絵巻」
- ③十二支絵葉書【申】
「十二類合戦絵巻」



②



③

秋季連続美術講座

2015年9月20日(日)―9月23日(水・祝)

大阪市立美術館の学芸員がさまざまなジャンルの作品、作家をめぐって情報発信します。どうぞお気軽にご聴講下さい。

9月20日(日)

- ①鳥羽絵と大坂 秋田達也
- ②蘇軾と米芾
―本館所蔵の二件の重要文化財書蹟について― 弓野隆之

9月21日(月・祝)

- ③美術館で仏像を観る 齋藤龍一
- ④鍋井克之と『大阪繁盛記』 土井久美子

9月22日(火・祝)

- ⑤詩と絵画
文嘉筆「琵琶行図」(阿部コレクション) 森橋なつみ
- ⑥土佐光起筆「大寺縁起絵巻」(堺市・開口神社蔵) 知念 理

9月23日(水・祝)

- ⑦木から見た日本の美術―素材選択の文化誌― 児島大輔
- ⑧煎茶と茗謙図録 守屋雅史

時間：各日とも午後1時30分―午後3時(各テーマ45分づつ)

場所：美術館1階講演会室

定員：150人

①～⑧とも申込不要 聴講無料 ただし当日の観覧券が必要です。

大阪市立美術館開館八十周年記念 公益社団法人日本書芸院創立七十周年記念 特別展

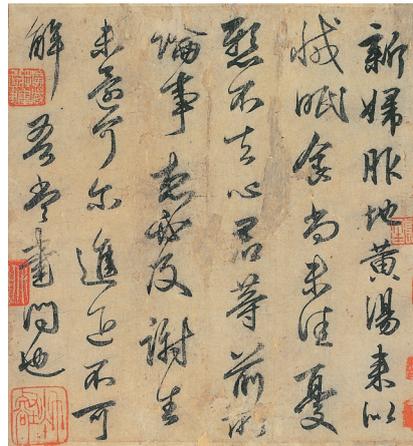
「王羲之から空海へ―

日中の名筆 漢字とかなの競演」(予定)

2016年4月12日(火)―5月22日(日)

関西地区は王羲之を中心とする法帖やその流れをくむ作品を学んで一家をなす書家が多く、また日本の書も王羲之の書法をもとにして独自の発展を遂げてまいりました。そこでこの度は、書の伝承を中国・日本それぞれの名蹟によって俯瞰します。

中国では王羲之から初唐の三大家や宋の四大家、日本では空海をはじめとする三筆・三蹟や平安仮名の精品など、200余件を展示すべく交渉中です。



王献之 地黄湯帖 原蹟・東晋時代・4世紀
台東区立書道博物館蔵

美術館本館の休館について

美術館外壁補修工事のため、平成27年11月2日(月)より平成28年2月下旬(予定)まで、当館の本館1・2階展示室を休館します。再開館の日程については、大阪市の広報、当館ホームページなどでお知らせします。なお、地下展覧会室はこの間も通常どおり開館しています。

大阪市立美術館 天王寺公園内

Osaka City Museum of Fine Arts

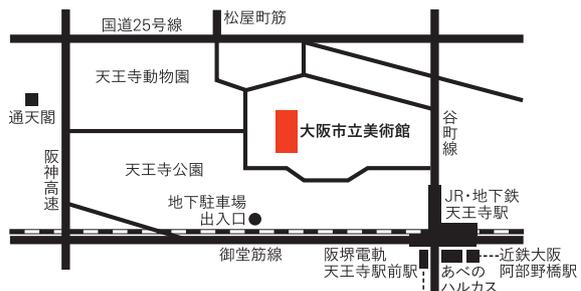
〒543-0063 大阪市天王寺区茶臼山町1-82

tel. 06-6771-4874 fax. 06-6771-4856

http://www.osaka-art-museum.jp

開館時間＝9:30～17:00(入館は16:30まで)

休館日＝月曜日(ただし月曜日が祝日の場合は翌平日)



交通案内：地下鉄御堂筋線・谷町線、JR「天王寺」、近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」、阪堺電軌上町線「天王寺駅前」下車、または市バス「あべの橋」下車、北西へ約400m